戦争と報道写真
Wars and Photojournalism

石川文洋
ISHIKAWA Bunyo

カメラマンの石川です。私はカメラマンなので、フォトジャーナリズムには深い関心をもっています。だけど私は撮る方ですから、写真を提供するだけで、報道写真に関する研究はしておりません。最初にロバート・キャパと、ベトナムの戦争報道ということを承っておりました。ベトナム戦争が終わったのは1975年ですから、もうベトナム戦争を知らない世代が多いと思います。なぜベトナム戦争が起こったのか、というところから話を始めますと長くなるので、その点は省略して話を進めたいと思います。

私が今カメラマンとして寂しく感じるのは、今、フォトジャーナリズムは非常に厳しい状態にあるからです。なぜかというと、それはテレビの影響が大きいからです。人々の映像に対する関心がフォトジャーナリズムからテレビへと移っている。初めてキャパが活躍したスペイン戦争の時代はまだテレビはありません。それからキャパを有名にしたスペイン戦争の「倒れる兵士」、アメリカのノルマンディーの作戦で兵士が渡っていく、ブレてるような写真があります。その写真を掲載した『ライフ』という写真週刊誌があり、テレビのない時代に、800万部と爆発的に売れました。『ライフ』にはキャパのスペイン戦争、ヨーロッパ戦線、北アフリカ戦線の写真が次々と掲載されました。写真週刊誌を中心にしたフォトジャーナリズム時代が長く続き、『ライフ』だけでなくて、『ルック』『ポスト』『ピクチュアー』など似たような写真雑誌が刊行されました。日本でも戦後、フォトジャーナリズムの時代が長く続きました。そこでベトナム戦争につながっていくのですが、私が最初にベトナムへ行ったのが、1964年8月です。東京オリンピックの年です。その時、私はムービーのカメラマンでした。

Rikkyo American Studies 26 (March 2004)
Copyright © 2004 The Institute for American Studies, Rikkyo University

毎日映画社退社後、ドキュメンタリー映画を作ったり、ニュースを撮ったり、そういう仕事で私は香港のアメリカ人の会社にいて、そこの仕事で初めてベトナムに行きました。その時の体験でベトナムに強い関心を持ち、1965年1月から1968年の12月まで満4年間住んでアメリカ軍、南ベトナム政府軍の作戦の様子を撮影しました。ここにいらっしゃる方々はベトナム戦争を知らない方がずいぶんいるのではないかと思います。そこで私の写真を見ていただきながら、話を進めたいと思います。

ベトナム戦争報道の特徴

これはベトナム戦争が続いている頃の1971年に私が出した3冊目の本です。この本の帯の説明をします。「アメリカが信奉する自由とは、正義とは、博愛とは何か」「想像を絶する物量と人命を賭けて陰謀と虐殺を全土に展開した侵略者をベトナム戦争に6年間従軍した著者が民衆にかわって断罪する」。侵略者というのはアメリカのことですね。これは私が書いた文ではありませんが、私もこの帯に共鳴していたんです。50万以上の兵をベトナムに送り、農村が戦場となって多くのベトナムの民間人が殺されていた。報

「炎上」（撮影：石川文洋、1966年）

道写真家のこういう文章というのはジャーナリストの枠を逸脱しているのではないか、という意見もあります。もっと客観的に、と。だけど当時私はアメリカのベトナムでの戦争に対して怒りをもっていたので、この文章に共鳴をしました。

ここで一言申し上げたいのは、ベトナム戦争というのは、カメラマンや記者が最前線まで長期に行けたことが大きな特徴です。このように自由に撮影できた戦争はベトナム戦争以前にはなく、ベトナム戦争以降にもありません。イラク戦争のアメリカ軍にもジャーナリストが従軍しましたが、長期ではありません。私は4年間ベトナムにいて従軍を続けました。それが出来たというところが、他の戦争と違うところだと思っています。戦争は、昔の戦争も今の戦争も将来起こる戦争も私は同じだと思っています。ですからアフガニスタンもイラクの戦争も、ベトナム戦争も朝鮮戦争も皆、同じです。どこが同じかというと、戦争は殺し合いということです。ベトナム戦争は、最前線まで長期行けたこと、戦争のいろんな面を多くのカメラマンが取材できたところに特徴がある。それもベトナム人以外の第三者の目で撮影できました。日本の新聞社の特派員として日中戦争、大平洋戦争へ多くのカメラマンや記者たちが行きましたが、当時は記者、カメラマン

「戦争を見る瞳」（撮影：石川文洋）

の心情が、日本の軍部、政府の方針にかなり近く大本営の広報のような発表しかできなかった。ベトナム戦争は第三者、日本人も含め多くの国のジャーナリストが従軍して、発表も自由だった。一方日本の戦争の場合にはかなり厳しい検閲があった。アフガニスタンも多くのカメラマンが行きましたけど、ベトナム戦争のように長期従軍とはなりませんでした。イラクの戦争もそうです。そこにベトナム戦争と他の戦争と大きな違いがあります。今後もそういうベトナム戦争のような取材はないだろうと思います。

『プラトーン』という映画がありました。プラトーンというのは小隊のことで、下からいきますと、分隊というのがあり、小隊、中隊、大隊、連隊、師団があります。その分隊というのは14人くらいで構成されていますが、カメラマンは分隊と一緒に最前線へ行くことができた。そのために非常に多くの犠牲者も出ました。ベトナム戦争だけではなく、カンボジアもラオスも含めて日本人のジャーナリストは14名が亡くなりました。日本人も含む70名近くの外国人ジャーナリストが亡くなっております。ベトナム人、カンボジア人、南ベトナム解放民族戦線と北ベトナム軍のベトナム人カメラマンを加えますと、私の計算では173名が死んでいます。最前線に行けた分だけ危険も多かったのです。そのようにして世界のカメラマンによ

「Keep Your Head Down」
（撮影：石川文洋、1967年）

って多くの戦場の写真が残されたというところに、ベトナム戦争の特徴があります。

写真週刊誌の衰退

まだテレビが発達しない時代にフォトジャーナリズムは、映像を中心とした週刊誌、月刊誌が非常に大きな訴える力をもっていた。日本もそうでした。しかし、テレビ文化がすごい勢いで家庭に押しよせてきた。テレビは、速報性があります。広告の媒体がありますから、『ライフ』休刊になったのも、『ライフ』の広告がテレビに移り、経営困難になったということも大きな原因でした。私が1964年にベトナムへ行った年、日本はオリンピック関係でどんどん海外へ取材に行きました。テレビの取材も多かったのですけれども、そのような状況の中で日本の週刊誌が次々と刊行されました。フリーのカメラマンの写真は週刊誌が発表の媒体として非常に大きな力を持っていました。当時の週刊誌はベトナム戦争に力を入れていたのです。各週刊誌がベトナム戦争を取り上げていました。

今、週刊誌に報道写真を載せていくというのは非常に難しくなっています。そのことで私の例をあげますと、去年私はアフガニスタンを取材して、いろんなメディアに写真を売り込むとき実際に身を持って感じました。アフガニスタンの写真を扱ってもらえないのです。その原因は日本が豊かになっているところにあると思います。グラビアが、旅、料理、女性など読者の楽しめる内容へ移っている。イラク、アフガニスタンといった報道写真に編集者があまり関心を示さなくなってきた。読者が関心を示さないから編集者が取り上げないのか、編集者が取り上げないから読者がそういったものから離れていくのか、私は両方に原因があると思っています。ベトナム人民軍の基地に入って取材するのはなかなか難しいのですが、撮影が実現した。「ベトナムの人民軍の師団基地を今取材してきたけれどもどうだろうか」と週刊誌に言いましたら、「今アオザイ女性の写真を他のカメラマンに頼んであるから、掲載できない」とのことだった。現在のフォトジャーナリズムを象徴するように感じました。その基地はベトナム戦争中はア

メリカ軍歩兵第25師団基地で私は何度も通い沢山の写真を撮りました。アメリカ軍撤退後は南ベトナム政府軍の基地となった。終戦後、今は南ベトナム政府軍に勝った人民軍の基地になっている。ベトナム戦争の歴史がその基地に現われています。しかし、現在の若い編集者にはベトナム戦争について知らない人もいます。

以前には、フォトジャーナリズムの最盛期があって、80年代から日本の経済が豊かになると共に、テレビが発展し、テレビコマーシャルが盛んになるにつれて、広告のとれないフォトジャーナリズムが衰えてきてます。私たちフリーのカメラマンにとっては非常に厳しい時代です。また逆にいいますと、前はフォトジャーナリストにとって良い時代があったということですね。だけれども、報道写真は非常に大切なものだと私は思っています。なぜかというと、カメラマンが現地へ行って撮影しておけば、その時は週刊誌で報道出来なくても、写真自体が記録性をもっているからです。テレビやドキュメンタリーをもう一回見るのは大変だけれども、一枚一枚の写真は、写真集に残しておけば、図書館に保存され、次の世代が見ることができる。報道写真はそういう力を持っていると、私は思います。

日本の戦争報道

戦争報道に関していいますと、戦争の写真はずっと前からあります。アメリカでは南北戦争のたくさんの写真が残っています。日本でも西南戦争の写真が残されています。昔カメラが大きいのでレンズも暗くフィルムの感度も低いから三脚で固定するので、動いている被写体が撮りにくい。テレビがなかった時代に組写真が誕生し、一枚の写真で見せるのではなく何枚かの写真を組んで一つのストーリーを作るという手法ができました。この手法はドイツの新聞が最初に発表したのですけど、そのような時代に、小型のライカというカメラができました。ライカは簡単に持ち運びが出来、その分だけいろんな対象に迫っていける。組写真が出来て、ライカが出来て、『ライフ』のような写真雑誌が刊行された。そういった時代の中でフォトジャーナリズムが発展していったのです。

太平洋戦争にもアメリカから多くのフォトジャーナリストが参加しています。戦時下でのアメリカの報道写真と日本の報道写真との大きな違いは、日本の報道写真は、極端にいいますと、「勝ったぞ勝ったぞ」と中国の城壁の上で万歳をしているような写真が非常に多いのです。カメラマンがジャーナリストの目で撮った写真が、日本の戦争の写真の中では非常に少ない。これは大変不幸なことです。私は戦争を防ぐためには戦争を知らなければいけないという気持ちを持っています。戦争を知るためには、いろいろな方法がありますけれども、その一つに写真の力があります。だけど、日本の戦争の写真というのは、戦争の苦しさ、戦争の悲しみ、戦争の残酷さ、そういったものが写されていません。だから私たちは日本の戦争がどういったものかということを知ることが難しいのです。それは日本人にとって不幸なことだと私は思っています。

そういった点で、ベトナム戦争は先程も言いましたように、最前線まで行き、世界中のカメラマンがジャーナリストの目で戦争を撮った。何故それができたかというと、アメリカ軍が大きく協力をしたということがあります。アメリカはジャーナリスト、カメラマンに最大限の協力をした。それがアメリカのベトナム戦争にとってプラスになると思ったのです。ところがプラスにはならなかった。最前線のいろんな写真がどんどん発表されてしまった。戦争は残酷だからアメリカの残虐行為の写真もある。アメリカは戦争を自由に撮影させるのはプラスにはならないと感じて、それで湾岸戦争の時はジャーナリストの従軍を厳しく規制し、イラクの戦争の時はアメリカ主導の報道体制を敷いた。アメリカの目の届く範囲の中でのみ取材をさせたということになります。

戦場のカメラマン

それではベトナム戦争ではアメリカの報道はどうであったか、という今日の主題です。ベトナム戦争の起源をどこに置くかということは、いろいろ議論があります。私の場合は1960年に南ベトナム解放民族戦線が結成されてからとしています。勿論その前のインドシナ戦争からアメリカは介入

していますけれども、一応起源を1960年とします。フランスのインドシナ戦争もフランス人ジャーナリストによって報道されていますが、この頃からアメリカの介入した様子も報道されてきています。インドシナ戦争で日本人ジャーナリストはどうしていたかというと、例えば朝鮮戦争は、日本人ジャーナリストは従軍してません。アメリカのデヴィッド・ダグラス・ダンカン（David Douglas Duncan）ほか何名行っていますけれど、まだ第二次世界大戦が終わって、日本では報道合戦は始まっていなかった。朝鮮戦争に日本はジャーナリストを派遣する力を持っていなかった。ベトナム戦争に関しては、ベトナムが同じアジアというのもあり、東京オリンピック以降、日本のベトナム報道が広がっていった。週刊誌も増えたということで、ベトナムへ日本のカメラマンが行くようになった。

最初に岡村昭彦さんが行きました。ベトナム報道の先駆者といっていいと思います。岡村さんがカラー写真で撮ったベトナム戦争の戦場は非常に訴える力を持っていた。私たちは今まで戦争というものを、遠いところで起こっているものと思っていたが、その戦争を身近にしたと言えると思います。そして澤田教一さん、今映画や舞台で演じられ若者に人気のある一ノ瀬泰造さんたちがいました。私の知っている限りでは、50名以上の日本人のカメラマン、これはムービーではなくて、スチル写真を撮るカメラマンが、ベトナムへ行っています。そのなかで長く戦場を取材の対象としたカメラマンは8名います。その日本人たちのベトナム報道の取り組み方と、ヨーロッパ人、アメリカ人の間には大きな違いがあるように思います。一つはその8名はどういった人たちであったか。さきほどの岡村さんは

「村には、まだ子どもたちが」
（撮影：石川文洋、1966年）

PANA通信という、シンガポールに本社がある通信社の特派員として行っていました。PANA通信では、亡くなった嶋本啓三郎さんがいた。ピューリッツァー賞を取った澤田教一さん、やはりピューリッツァー賞を取った酒井淑夫さん、最初に戦場で亡くなった峯弘道さん、それからあと病気で亡くなりましたけど、赤塚俊介さんと4名がUPI通信のスタッフでした。一ノ瀬泰造さんと私はどこにも所属しない完全なフリーでした。

8名に共通しているものは何かというと、日本では報道写真家としてまだ完全に自立していなかったと言っていいかと思います。私は特にそうでしたけど、逆にいうと、日本ですでに有名な写真家たちは、短期間来たことはあるけれども、戦場の取材を続けた人はいなかったのです。それはなぜかといいますと、岡村さんも澤田さんも酒井さんほかの方々も長く戦場を取材したのですが、ベトナムを報道しながら自分の人生、自分の生き方を、戦場の中で模索していたのだと言えると思います。しかし、なかなか先が見えなかった。大学と同じです。大学でも自分の生き方が見つかれば4年もいる必要はないと思うんです。早くやめて決めたことに専念すれば良い。ベトナムでも考えているうちに、だんだん長くなって亡くなった方もいると思います。戦場で長期間人生を模索しているというところが、今のイラクやアフガニスタンの取材の仕方とちょっと違うと思う。今もアフガニスタンやイラクへ行って取材をしている若い方もいます。しかし客観的な状況として、私たちがベトナムにいた60年代はまだ日本経済も低く貧しい時代です。今は経済的には、昔よりはまだ楽です。ですから私たちの時代は一言でいうとハングリーだった。私の場合は、ハングリーも超ハングリー

「橋の爆破は失敗」
（撮影：石川文洋、1968年）

で、他の方はそれぞれUPIとか一応給料を保障してくれるところがあったけれども、私と一ノ瀬泰造さんはそういうものが何もない。ですから私の場合はネガを売って生活していたのです。自分の撮った写真をネガごと売るわけです。ですから私の写真集は売った残りのネガで作った写真集です。私にはそれでも良かったのです。なぜかというと、ベトナムで報道カメラマンになろうとしていたのではなくて、何をして良いか自分の人生を探っていたからです。自分を報道カメラマンとして自覚していたら、ネガを売ったりしません。大切なネガですから。ネガを売っている人はアメリカ人にもいました。

戦場にはいろんなカメラマンが来ていました。そこでどういったベトナム戦争の取材をしていたかというと、日本人としては、タイプとして、私のようにフリーで向こうに住んでいた人と、それから澤田さんや峯さんのように外国の通信社で仕事をしていた人、岡村さん、嶋元さん以外にもPANA通信で仕事をしていた人がいました。ほかに朝日新聞、毎日新聞、読売新聞といった新聞社のカメラマンが連載などの企画を取材して、帰っていくという短期間の滞在をするカメラマンが約50名来ていました。

外国の場合は、例えばベトナムでピューリッツァー賞をもらったAPのホルスト・ファース（Horst Faas）はずいぶん長くいました。それからアンリ・フエット（Henri Huet）という人は、ベトナム人のお母さんとフランス人のお父さんをもったハーフの人ですけど、ベトナムで生活していました。それから『ライフ』の大カメラマン、ラリー・バローズ（Larry Burrows）もいました。我々から見れば神様のようなカメラマンです。その人がときどき来ました。バローズが最初に『ライフ』に載せた“Yankee Papa”という、ヘリコプターに乗った機銃手が撃たれている、非常に衝撃的な写真がありました。ほかに『ライフ』のカメラマン、コー・レント・ミースターもいました。デヴィッド・ダグラス・ダンカンもベトナムを撮影しています。それからフリーのティム・ペイジ（Tim Page）、この人の写真集も持っていますが、戦場で会ったことがあります。イーグル・ネストという香港ヒルトンのナイトクラブでもちょっと見かけたことがあるのですが、ものすごくハンサムなイギリス人で、我々みたいな東洋人の背の低いのから見

「真中を通れば大丈夫」
（撮影：石川文洋）

ると、圧倒されるような雰囲気をもっているカメラマンでした。

ベトナム戦争を取材するヨーロッパ人、アメリカ人と日本人の違いについて。ベトナムにはピーター・アーネット（Peter Arnett）というピューリッツァー賞を取った優秀なジャーナリストがいました。私は日中戦争や太平洋戦争も含め、日本の戦争で日本のジャーナリズムというのは機能していなかったと思っています。だけどベトナム戦争では、アメリカのジャーナリストは、「ベトナム戦争は汚い戦争である」と、批判をしていました。この点私はすごいと思いました。しかし私たちの考えとちょっと違っていると感じたのは、私はベトナム戦争はアメリカの侵略である、あの狭いところに50万もなぜ送る必要があるのか、と思っていました。アメリカに対するベトナム民族の独立闘争であると思っていました。ところがヨーロッパやアメリカのジャーナリストは、汚い戦争である、アメリカは間違っていると言っていたが、アメリカ軍はベトナムの共産主義者ベトコンとベトコンを支援する中国、ソ連など共産国と闘っていると受け取っていたと私は思います。戦争をしている当事国のアメリカのカメラマンと私たち日本人の第三者のカメラマンとの考え方の違いが一枚の写真だけ見ては分からないが、写真として一冊の本にすると現われてくると思います。アメリカとしてはせっかく至れり尽くせりで従軍させたのに、こんなにアメリカを

批判されたらたまらないという気持ちがあったと思います。今後のイラク、アフガニスタンの報道でどうなっていくのか、ということはまた別の話になりますので、一応私の話はここで打ち切っておきたいと思います。どうもありがとうございました。